

---

---

# 学長挨拶



敬愛大学学長

中山 幸夫

---

**中山** 敬愛大学の中山と申します。この4月から、まさにコロナ禍の中で学長に就任しまして、教職員の力をいかに結集して大学運営に当たるかということで、いろいろ試行錯誤、時に右往左往しながら現在に至っております。

本日の、このシンポジウムですが、オンラインによる開催ということで、遠方の方もこのシンポジウムに参加をいただいているようです。敬愛大学はどこにあるのかということで参加いただいている方もいらっしゃると思いますが、千葉市稲毛区にございまして、その稲毛区にあるキャンパスの3号館7階からシンポジウムをお伝えしています。

少し大学についてご紹介させていただきますと、本学は、開学が1966年、昭和41年で、東京で最初にオリンピックが開催された2年後のことです。今も申し上げましたが、千葉市の文教の町、稲毛に、このキャンパスがございます。当初は経済学部だけの単科大学でしたが、平成の時代になりまして国際学部ができました。そして、令和の時代になりまして今年度から教育学部がスタートということで、現在、3学部体制の大学となっております。

また、大学には学部の枠を越えた副専攻がございまして、その中の一つに「AI・データサイエンス」という副専攻があります。これは少し前から、こういった取り組みをしていたわけですが、今年の6月、文部科学省が推進する、「数理・データサイエンス・AI」の認定プログラム、リテラシーレベルではありますが、全国の第1号認定校に採択されております。文系の大学ですが、このAI・データサイエンスも副専攻として置いて力を入れているということです。

さて、本日の、このシンポジウム、コロナと教育を巡る一連の問題についてということで、非常に大きなテーマでした。ご登壇いただいた方々に多角的な視点からご発表、ご提案をいただきまして、また、質疑応答も含めて問題意識を深めることができたのではないかと考えております。基調講演、そして、パネラーの方々のご発表について、私のほうで要約はいたしません、それぞれの分野の第一人者においでいただきました。

三幣貞夫先生、教育再生実行会議での長い期間にわたるお仕事、大変お疲れさまでございました。三幣先生は地方自治体の教育長の代表として、この教育再生実行会議の有識者メンバーに加わられたと聞いております。

三幣先生は、学校現場での豊富な経験、そして、教育行政において長年にわたるご経験をお持ちで、二つのことをいつも強調されておられます。それは、地域の子どもの地域でしっかり育てる教育。それと、全人教育ですね。全人格的な教育を大事にするということで、大変、感銘を受けております。本日の基調報告では直接触れてはおられませんでした。1学級当たりの子どもの人数を引き下げるといふこと、これについても、確か今年の教育再生実行会議において資料を提出されてお話しをされていたと思いますし、今年3月の参議院文教科学委員会においても参考人として提案されていたように記憶しております。

パネラーの皆さま方にも非常に多角的な視点からお話をいただきました。市川先生は、自己紹介の中にありましたが、学校現場での豊富な経験をお持ちで、そして、海外の多くの学校も視察に行かれて、また、種々の教育形態についても精通されていらっしゃいます。私も専門が教育学ですから、先生が紹介されていたドルトンプランやフレネ学校、モンテッソーリ教育などは聞くだけでうれしくなってしまう。同じ大学にいながら、なかなかこちらのほうの話をしたことはありませんので、今度ゆっくりお話しさせていただきたいと思っております。

本日、オンラインでご参加いただきました野澤先生、千葉県の情報教育部の部会長としてのお立場から、これまでの2年間をふり返りながら、大変なご苦勞があったということ、本日のお話で初めて私どもは知ることができました。そういう中から、非常に示唆に富むご提言をいただきました。ご多忙の中、参加をいただきまして誠にありがとうございました。

小林先生には、実はちょうど10年前、東日本大震災の年だったものですからよく覚えておりますが、8月の教職員研修会においていただき大学改革についてご講演をいただきました。私にとっては、非常にインパクトがあり、本学の教職員の意識改革にもかなり大きなインパクトを与えていただいたと思っております。それ以降、本学では教職員が一体となって取り組む「教職協働」が一つの合言葉となりました。その意味でも、本日のシンポジウムも含めて小林先生のご講演に改めて感謝申し上げる次第です。

そして、武内先生は教育社会学の大家としてよく知られている方ですが、『内外教育』に定期的にコラムを執筆されているということで、武内先生のことをご存じの方もたくさんいらっしゃいます。この他にも、武内先生は、ご自身のブログのホームページをお持ちで、非常にコンスタントにいろいろな時事問題、話題をその中に取り上げて、独自の視点から論説を發表されております。続けることの大変さと大切さを、武内先生の日頃の取り組みから、私などもいろいろと教えていただいています。

本日の、この基調報告、パネラーの先生方のご発表、そして、モデレーターの水口研究所長との質疑応答から、それぞれに有益な示唆を得ましたが、全体を通して私のほうから、コロナ禍と教育に関して3点、指摘をさせていただきたいと思っております。やりとりの中で幾つかのことが確認でき、見えてきたのではないかとということで、その一つが、このコロナの問題というのは大変な難題であるわけですが、コロナ禍を私たちが経験し、そして、これと向き合っ、いろいろ試行錯誤していく中でさまざまな気づきがあったのではない

かということです。特に、大学の話になりますが、授業に関しては各大学において、教職員の意識が多少なりとも変わっていった、意識改革が進んだのではないかと、改めて感じております。

本学でも、コロナ禍に見舞われた昨年より、授業の計画や運営について多くの教員が、まずシラバスの中身の点検から始めまして、授業内容と、方法の見直しに、かなり積極的に取り組んできたように思います。2年間のこれまでの取り組みではありますが、対面方式、オンライン方式、いずれの授業におきましても本学では KCN (Keiai Campus Navigator) という学習ポータルサイトを活用した授業の運営を行っております。授業運営については教員自身のふり返りと併せて、学生たちの授業評価も行っており、そうしたところから見て判断する限りにおいては、一定の成果が出ているのではないかと見ております。これが一つです。

二つ目ですが、これはウィズコロナ、アフターコロナ「ニューノーマル」の時代の教育の在り方、学びの在り方についてです。これは教育再生実行会議や文部科学省の GIGA スクール構想など、道しるべとなる具体的な指針、方策があります。そして、それに沿った優れた取り組み、実践もあると思います。ただ、学校現場全体で、これを広げていくためにはいろいろな課題があるということで、一つは財政的な支援であると思います。それと、このデジタル化への対応についてです。確かに、進めていかななくてはいけないのだろうと思いますが、しかし、そのための研修もしっかりと充実したものにしていかなければならないということ。それと、教職員の实態として、非常に忙しく、多忙感を感じている教員が少なからずいるということです。この教育界の働き方改革、こういったことも含めた環境整備をもっと進めていかなければならないのではないかと感じました。

そして、三つ目ですが、本日のシンポジウムでは、ポストコロナ期の教育、流動化、多様化する教育における新たな学びの在り方に迫ろうとしたわけですが、そうした学びが教育の充実を図り、教育の質保証を担保できる学びであるのかどうか、ここのところは今後もしっかり検討していかなければならないと思います。ICT 教育の充実、活用ということも言われておりますけれども、スキルも大事ですが単なる技術論に走ることがないよう、心していかなければならないと思います。

教育は、一人一人の自己実現を支えるものであると同時に、社会を支える人間を育てるものでもあります。大学においては、色々な意見はあるかもしれませんが、人材を育成するという、これは考えていかなければいけません。そうしたことも視野に置いた大事な根本的なところをしっかりと捉えて、今後におけるポストコロナの新たな学びの在り方を一緒に探ってまいりたいと思っております。

本日のシンポジウムの内容から学び取れるものがありましたら、各大学、学校、教育機関における今後の取り組みに生かしていただくということをお願いしたいと思います。最後に、本日のシンポジウムにご参加いただきました皆さま、そして、ご登壇いただきました先生方に心から感謝を申し上げ、主催校を代表しての御礼のあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。